武谷家所蔵の武谷三男博士史料を閲覧して

西谷　正

武谷三男博士の史料を閲覧するため、2012 年 3 月、年 8 月、2013 年 8 月の三度、武谷博士邸を訪問した[i]。博士邸は石神井公園の近くにあり、現在も武谷三男の表札がかかっている（図 - 1）。博士宛の書簡（含むハガキ）、著書原稿、ノートなどの資料が段ボールに入れられている（図 - 2 参照。第一回目に訪問した時の写真で、現在とは少し違っている）。書簡などは、年代が書かれた封筒に入れられているが、書簡でないものや他の年代のものも混ざっていてよく整理はされてない。著作原稿は、著作ごとに封筒にいれられているものもある。
必要な資料かどうかの判断に時間がかかり調査は不十分である。

図 1　武谷博士邸

図 2　資料の入った段ボール

現在までに閲覧した資料の紹介を簡単にしたい。（気になったものは少し説明を加えました。）

１．大学生卒業までの資料

- 高校の頃、かたつむりを収集して英文にしてもらった論文の別刷り
- 「一自然科学徒の随筆」（T.K.生名で発表京）都学生フランス連盟会誌『A.E.F.K』第一号（1933 年 3 月 1 日発行）
- 武谷の卒業論文に助言を与える坂田唱一からのハガキ（このハガキで武谷は坂田の卒業論文を読んでいることがわかる。坂田の卒業論文は、武谷がそのまま持っていて、現在は坂田記念史料室にある。）
- 学友原光男らからの書簡。
- 数学の講義のノート（数理物理学演習、数論Ⅰ　園教授、など 30 冊くらい。この中には、学生時代よりもっと後の、「物質と場の対立」のもとになる写し、「八木

秀次宛ての手紙」の写しなどが書かれたノートも含まれている。(図 - 3)

図 3　講義ノート、読んだ論文のノート、著作論文の写し等を書いたノートなど

２．大学卒業後から湯川中間子論第 4 論文までの間の、坂田、湯川からの書簡。

３．川端署でとられた調書（の写し？）と思われるもの

４．『世界文化』の新村猛から武谷の就職を心配する書簡など。

５．加藤正からの数通のハガキ

６．中間子討論会の原稿を出版するための書簡（送られた坂田の手書き原稿もある)。

７．坂田の疎開先、富士見訪問の際の坂田、谷川からの書簡。

８．坂田からの折々の書簡。転居通知(1949)には印刷された行間に坂田の手書きで、名古屋大学文学部長あてに出した武谷の（講師）辞表を取り下げてほしいということが書いてあり、武谷はいったん名古屋大学文学部の科学哲学の講師になったらしいことが推測される。コペンハーゲン滞在中に武谷に出したものもある。

９．武谷がブラジル滞在中（1958~1959、1961~62）の日本物理学者などからの手紙。

１０．　原稿用紙に書いた著作原稿

１１．　両親はじめ親戚からの書簡、坂西志保、由起しげ子[ii]、山代巴らからの書簡(ハガキ)など多数。

---

[i] 「戦前の武谷三男―中間子論を中心に―」(『東海の科学史』第 10 号、2013 年 5 月発行)。これは、2 回目までの訪問にもとづいて書いたものである。

[ii] 由起しげ子は芥川賞作家で、年譜には、武谷らから理論物理学を学んだことが書かれている。武谷をモデルとしたと思われる人物の登場する「それだけの結婚」という小説もある。